

---

# 血涙

子々

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血涙

### 【Nコード】

N2819B

### 【作者名】

子々

### 【あらすじ】

猫が死ぬのを目の前で見た妻と冷淡な夫の一片。

何だかとても泣きたくなりました。

私の目の前で猫が一匹、車にひかれて死んだのです。そのシーンは無情にも私の脳裏に焼き付いてしまい、思い出す度に私の胸を締め付け、ぞつとさせました。

「その道路で猫が車にひかれて……」

「ほお……。で？」

「血を流して死んでしまいましたよ。可哀想に……」

「なに、珍しいことじゃないだろう。どうせ野良猫だ、一匹や二匹死のうが何も変わらないさ」

夫の冷酷な笑いを背に感じながら、皿を洗っていると、また脳裏に昼間見た猫のシーンが浮かびました。私はかぶりを振り、嫌な映像を払い除け、再度手を働かせました。自然と眉間に縦皺が寄るのを感じました。自分でも恐ろしくなるほど、脳裏に焼き付いた例のシーンは鮮明でした。

人が死ぬ感覚と動物が死ぬ感覚、どう違うのでしょうか。洗濯物を畳みながら、窓の外を見ると、夕日が赤く煉瓦の塀を照らしていました。血のような空の色。あの猫が流す血は人と何ら変わりはない。

いませんでした。

なんて、残酷な世の中なのでしょう。何故、夫のあの非情な笑いは発せられたのでしょうか。何故、私はあのまま猫を置き去りにしてきてしまったのでしょうか。私も夫も、なんて残酷。

「久しぶりに、そこまで一緒に買い物に行かないか」

夫のそんな申し出に、喜んで賛同し、私たちは街へ続く道を歩き出しました。夫より数歩後を静かに歩き、先日の猫のことを忘れ、代わりに夫のたくましい背を脳裏に焼こう。そう思いました。

赤い赤い夕日に照らされた道。そこに一對の光が当たり、夫の姿が明々に照らしだされました。一瞬間、眩しさで目を瞑り、酷い轟音にハッと目を開きました。

ああ、なんて呆気ない。

夫の死ぬときを目の前で見てしまいましたが、不思議と涙は出ません。自分でもどうしてか分かりません。ただ、あまりにも呆気なくて……。涙の代わりに笑いが起こる始末です。私は狂ったように腹を抱えて笑いだしました。なんと滑稽なのでしょう。馬鹿にした猫と同じ死に方をするなんて、滑稽としか言いようがありません。

なんて、なんて滑稽。

目が霞み、貴方の姿が次第に薄れていき、ついには真黒闇になりました。喉の奥に異物があるように、息苦しくなりました。ああ、なんて呆気ない最期でしょう。

「なんて可哀想なお方」

どんなに冷淡な貴方の、呆れるほどつまらない死に様でも、私は笑うだけでは済ませられないようです。

「貴方って人は、なんて、可哀想なお方なのかしら」

私は声を上げて、泣いてしまいました。

夫の体から溢れ出す血は夕日のせいかな更に赤々と輝き、あのときの猫よりも鮮やかでした。

（後書き）

お読みくださり有難う御座いました。時代背景としては現代よりも少しばかり前です。

起承転結は相変わらず上手くつけませんし、拙い文書です。アドバイスや感想があればお時間のあるときにでも是非お願いします。

2006・12・15・藤原千世

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2819b/>

---

血涙

2010年11月10日14時54分発行